

見島におけるシロマダラ *Lycodon orientalis* の初記録

※¹川原 康 寛・※²伊 達 千 絵

※³磯 野 淳 子・※⁴樋 口 尚 樹

緒 言

見島は、山口県萩市の北約44kmの日本海上に位置する面積7.73km²の有人島である（加藤，2013）。対馬海流の影響を受けているため、山口県内の他の地域と比べて比較的温暖で、島内には丘陵部に温帯性の二次林があるほか、低地部には水田や集落が広がる（斉藤ら，1964）。

シロマダラ *Lycodon orientalis* は有隣目ナミヘビ科オオカミヘビ属の爬虫類で、北海道、本州、四国、九州および周辺島嶼（奥尻島、佐渡島、隠岐、壱岐、五島列島、女島、種子島、屋久島、硫黄島、伊豆大島、下甕島、鹿児島県竹島）に分布する日本固有種である（千石ら，1996；Toda & Okada, 1999）。日本に分布するヘビの中では比較的小型で、日中は倒木や石の下、石垣の隙間などに隠れているため、人目に触れる機会が少なく、詳細な生息状況は明らかにされていない（松井ら，2021）。山口県内では、内陸部や山間部で広く分布が確認されているが、島嶼部での記録はない（徳本ら，2002；徳本ら，2003）。

この度、2021年11月6～7日にかけて筆者らが見島の動物相を調査したところ、本種の死体が発見されたので報告する。

発見の経緯

2021年11月7日12時30分頃、見島南部の本村地区の道幅約5mのアスファルトで舗装された道路上で（図1）、筆者の一人・伊達により当該ヘビ1個体の死体が発見された。調査日の天候は晴れであった。発見場所は本村集落の東端部で、周辺には民家のほか農耕地や山林が広がる（図2）。

当該個体は頭部から胴部までが潰れて死亡しており（図3）、11月8日に筆者の一人・磯野によって萩博物館に搬入され、筆者の一人・川原によって冷凍保管された後、ホルマリン固定が施され、エタノール液浸標本（HAGI-Re 0081）として萩博物館に保管されている（図4）。

発見個体の特徴

シロマダラは灰色がかった地色で黒褐色の横帯が胴部に40本前後、尾に15本余りあることや、頭部の背面が黒っぽいことなどで特徴づけられる（千石ら，1996）。見島で採集された当該個体は、胴部に39本、尾部に15本の横帯があり、頭部の背面も黒いことから本種と同定された。ホルマリン固定された標本は、全長213.8mm、尾長46.1mm、頭幅6.8mm。体が潰れていたことから、この計測値は

※1 萩博物館 ※2 萩市立須佐中学校 ※3 NPO萩まちじゅう博物館 ※4 松陰神社宝物殿至誠館

本来の体サイズとは多少の差異があると思われるが、松井ら（2021）が示した孵化幼体の全長210～230mmに概ね収まるため、当歳生まれの幼蛇と推察された。

考 察

発見の前日にあたる11月6日、筆者ら一同は10時頃、15時頃、21時頃に同所を踏査したが、当該個体は見られず、翌日の午後になって発見された。本種は夜行性であるため、6日から7日にかけての夜間の活動時に何らかの車両に轢かれて死亡し、7日の午前中にはそこにあった可能性が高い。

これまでに見島で記録されているヘビ類は、アオダイショウ*Elaphe climacophora*、シマヘビ*Elaphe quadrivirgata*、ヒバカリ*Hebius vibakari vibakari*、セグロウミヘビ*Hydrophis platurus*、ニホンマムシ*Gloydius blomhoffii*の5種で（日野，1964）、陸棲種はこのうちセグロウミヘビを除いた4種となる。陸棲ヘビ類は、移動の際にごく短距離を泳ぐ場合があるが（たとえば松井ら，2001；吉川，2019）、基本的に長距離を泳ぐことはないと認識されている。そのため、明らかに陸棲種であり、たとえ成体であってもシロマダラが本土から遠く離れた見島へ泳いで渡ったとは考えにくい。本種は夜行性であり、日中は隠棲的な生活をしていることから、もともと島内に分布しながら今回の調査まで発見されなかったか、一方で木材などと共に海流によって運ばれたり、資材や人の荷物などに紛れて島内へ運び込まれたりした可能性も考えられる。

見島が本土と陸続きになった地学的証拠はないが、最終氷期には海深が現在よりも100m程浅かったと考えられていることから（たとえば小西ら，1999；松井ら，1998；大嶋，1991）、現在、部分的に水深100mに及ぶもほとんどがそれ未満の遠浅になっている本土と見島との間は、同時期には陸続きになっていたと推察される。すなわち、シロマダラが土着種であった場合、最終氷期以前から見島に分布していたことになる。

シロマダラはこの度の調査では1個体しか発見できていないため、見島に定着しているかは明らかにできなかった。今後も見島での陸棲ヘビ相調査を続け、本種の見島での自然分布の可能性を含め、出現理由について検証していく必要がある。

引用文献

- 日野 巖，1964：見島総合学術調査報告。In: 山口県教育委員会。p. 125. 大村印刷。
- 加藤庸二，2013：原色 日本島図鑑。pp. 202-203. 新星出版，東京。
- 小西省吾・吉川周作，1999：トウヨウゾウ・ナウマンゾウの日本列島への移入時期と陸橋形成，地球科学，53：pp. 125-134。
- 松井正文・田辺真吾，2001：溪流にいたヘビ2種。爬虫両棲類学会報，2001(2)：pp. 79-81。
- 松井正文・森 哲，2021：新 日本両生爬虫類図鑑。In：日本両棲爬虫類学会。pp. 165-168. サンライズ出版，彦根。

- 松井裕之・多田隆治・大場忠道, 1998: 最終氷期の海水準変動に対する日本海の応答-塩分収支モデルによる陸橋成立の可能性の検証-. 第四紀研究, 37(3): pp. 221-233.
- 大嶋和雄, 1991: 第四紀後期における日本列島周辺の海水準変動. 地学雑誌, 100(6): pp. 967-975.
- 斉藤 忠・小野忠熙, 1964: 見島総合学術調査報告. In: 山口県教育委員会. pp. 387-394. 大村印刷.
- 千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏 (編), 1996: 日本動物大図鑑(5). p. 99. 平凡社. 東京.
- Toda, M. , Okada, S. , 1999, New records of the colubrid snake *Dinodon orientale* (Hilgendorf,1880) (Reptilia: Colubridae) from Shimo-koshikijima and Takeshima Islands, southern Kyushu, Japan. Bulletin of the Osaka Museum of Natural History, 53: pp. 53-56.
- 徳本 正・山岡郁雄・田中 進, 2002: GIS (地理情報システム) を用いた野生生物分布調査II 山口県におけるヘビ類の生息状況について. 山口生物; 28: pp. 3-26.
- 徳本 正・山岡郁雄・大木克行, 2003: 山口県におけるシロマダラの採集記録. 山口県の自然, (63): pp. 15-20.
- 吉川夏彦, 2019: 自然教育園に生息する両生類・爬虫類. 自然教育園報告, (51): pp. 19-26.

謝 辞

本調査は、萩市による「見島・八町八反プロジェクト—千年の田んぼ・八町八反の成り立ちを探る！」事業の一環として、萩ジオパーク活動補助金を受けて行われた。また、文献調査にあたっては、萩市ジオパーク推進課の伊藤靖子氏にご協力いただいた。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

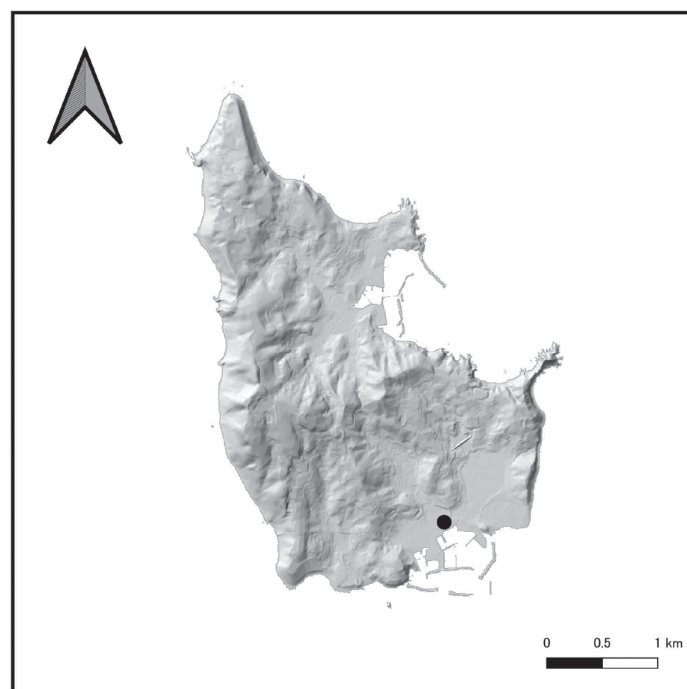


図1. 見島の地図. 黒丸(●)は、シロマダラの発見場所 (北緯 34°45'49.60", 東経131°09'10.50")を示す。



図2. シロマダラ発見場所の周辺環境（2021年11月7日 伊達千絵 撮影）



図3. 発見場所におけるシロマダラ死体の状況（2021年11月7日 伊達千絵 撮影）



図4. シロマダラの標本（2023年2月10日 川原 康寛 撮影）